

他者理解を育む道德教育を目指して

— 教員志望の学生が持つ次世代の子どもにつけたい力 —

京都橋大学非常勤講師 末澤 奈付子 教育学科 山内 乾史

抄 録

本研究は、教員を志望する大学生と教員を志望しない大学生の間で、道徳的価値観や規律に関してどのような差異があるかを、質問紙調査及びインタビュー調査によって明らかにしようとしたものである。この研究は、全体的な計画としては、学校文化と教員文化、生徒の向学校文化と反学校文化の形成と変容に道德教育がどのようにかかわっているのかを検証するプロジェクトの一環である。結果として、教員を志望する大学生においては、例えば「生徒は、担任の教師の指導を素直に聞く態度が必要である」という教員のイラショナル・ピリーフが、教員を志望しない大学生よりも強く検出され、規律や自主性を重視する傾向がみられた。一方で、教員を志望しない大学生においては、他者との関わりにおける感謝や礼儀を重視する傾向がみられた。

Key Words : 道徳的価値観, 教員の信念, 教員志望の大学生のイラショナル・ピリーフ

1. 本研究の背景

小学校では2018年度から、中学校では2019年度より、道徳は従来の教課外活動から「特別の教科（道徳科）」として全面的に実施されている。教科化に至った背景としては、2010年頃からの社会問題としての青少年のいじめ問題の発生件数の急増が挙げられる。いじめを苦にした不登校児童生徒の増加、10代の若者の自殺の増加に対する防止策の一環として、道徳教育の強化が提唱されたことに伴う教科化である。松野博一文部科学大臣（当時）は2016年11月18日の閣議後記者会見で、（道徳教育の目標である）「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共により良く生きるための基盤となる道徳性を養う」こと

で、いじめの根本的解決を図り、児童・生徒の他者に向けられた暴力や排除の行動を、「道徳心」によって改善するという目論みであると発言した（同日付『毎日新聞』<https://mainichi.jp/articles/20161118/k00/00e/040/236000c?fbclid=IwAR0mIE45Og8mZMNGQHXL4ZhrS1gnX2uOI5bilDeLfqqgXuHUO3TlgJx-dqI>, 2022年6月15日閲覧）。

本田由紀（2020）によれば、教科化とは「すべての人々に一定の価値や規範を一律に注入」し、「全員に義務として特定の考え方・感じ方とふるまいを強要するもの」である。これを本田は水平的画一化と命名する。「特別の教科」となった道徳の授業においては、従来の登場人物の気持ちを読み取る授業や、「いじめは許されない」という文言を書かせる第三者的な視点

の授業ではなく、いじめ問題を自分自身に置き換えて、自らの問題として多面的・多角的に考えて議論することで、自分以外の他者との相互理解を深める道徳心の向上を目指すとされている。(表1参照)

表2に示されるように、戦後の学校教育における道徳教育の位置づけにおいても、教科としてではなく、学校全体としての取り組みから始まり、今回の教科化に至るまでにおいても紆余曲折があった。つまり国民の合意が明確に得られたわけでは決していないのであり、様々な議論や反対も未だに残っている。道徳の教育目標における「愛国心」という表記¹⁾は、戦前の教育勅語に基づく「修身」を核とした軍国主義的教育を想起させるであろうし、国家が指定した特

定の価値観を注入することと個性の伸長とをどのように擦り合わせを行うことができるのか等の議論があったのである。また、教科化に伴う評価においても、道徳で取り扱う題材や倫理的な内容には、絶対的な「解答」は存在しない。「解答」を求めるのではなく、「回答」を紡いでいくことが求められる。つまり、議論することそれ自体が前提であり、「自分自身に置き換えること」が重要視されているわけである。しかしながら、児童や生徒の数だけ「回答」は多数存在し、それらの「回答」が対立することも容易に想像できる。それを教員の客観的な立場から児童・生徒の伸長の評価を行うことが義務づけられたわけであるが、教育活動を行う際の教員の暗黙及び無意識に行われる指導や発言に

表1 小学校・中学校学習指導要領における道徳の目標 (下線は筆者による)

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として <u>他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性</u> を養うことを目標とする。
--

筆者作成

表2 学校教育における道徳の時間及び道徳教育の変遷

1958年	学習指導要領の告示 小、中、高等学校において、道徳教育は学校教育全体として行うことを明示 道徳教育の徹底化を図るべく、週1時間の道徳の時間を設置
1968年	小学校学習指導要領の改訂、(1969年は中学校、1970年は高等学校) 道徳教育及び道徳の時間の目標が明確化 高等学校においては、倫理及び特別活動との関連を重視
1977年	小、中学校学習指導要領改訂、(1978年は高等学校) 内容を再構成し、より具体的な目標に
1989年	学習指導要領の改訂 小、中学校の内容項目を4つの観点から再構成
1998年	学習指導要領の改訂、(1999年は高等学校) 小、中学校では学校教育全体としての道徳教育を図ることを明示
2002年	文部科学省により、道徳教育の副教材として「心のノート」が配布
2008年	小、中学校学習指導要領改訂、(2009年は高等学校)
2014年	「心のノート」を全面改訂し、教材としての「私たちの道徳」が配布
2015年	小、中学校学習指導要領の一部改訂 道徳の時間を「特別の教科 道徳」として位置づけ、多様で効果的な道徳教育の指導法へと改善、検定教科書・評価制度の導入

筆者作成

は、教員自身の主観や信念・心情（ビリーフ）が含まれるのではないだろうか。本田（2020）の小中学校の教員を対象とした調査においても、「特別の教科 道徳」に対して、「疑問に思う」、「やや疑問に思う」という否定的な回答が6割を占めている一方で、4割の教員が「とても望ましい」、「まあ望ましい」と回答した。つまり、教員の道徳に対する肯定的・懐疑的な態度によっても指導法や評価は異なるであろうし、教員自身の道徳観も多大に影響する。このような先行研究の状況を踏まえて、本研究では、「イラショナル・ビリーフ（irrational belief）」という心理学理論を援用し、教員志望の大学生と、教員を志望しない大学生との間に、道徳的価値や規律に対して、どのような差が検出され、どのような道徳的な力を重視するかの比較調査をおこなった。

なお、この研究は、全体的な計画としては、学校文化と教員文化、生徒の向学校文化と反学校文化の形成と変容に道徳教育がどのように関わっているのかを検証するプロジェクトの一環であり、第一歩である。

2. 先行研究の概観

先述した「イラショナル・ビリーフ」とは、

「～でなければならない、～であるはずだ」という絶対的な（しかし、非合理的な）信念や心情を示す。これは、アメリカの臨床心理学者のEllis（1975）が提唱した論理療法に由来する。論理療法とは、ある出来事や刺激が心理的な問題や生理的な反応を引き起こすのではなく、それをどのように受け取ったかという認知を媒介として生じるとされており、論理的な思考、あるいは合理的な思考が心理に影響を与えるとき、ABC理論としてモデル化されている。

具体例を図1に示した。例えば、上司に怒られた新入社員がいるとしよう（出来事：A）。その新入社員は怒られたことをどのような信念や心情を通して解釈するのだろうか。例えば、「怒られることは恥ずかしい」と捉えるか、「怒られることは期待されている証拠である」と捉えるかは個人の認知の問題であり（信念：B）、その認知によって個人の行動の結果（C）が変わってくるという論理である。

このABC理論を背景にして、教員の指導行動や態度に現れるビリーフ研究を行ったのが河村茂雄・國分康孝（1996a・1996b）である。彼らは小学校教員に向けた「教師特有の指導行動を生むイラショナル・ビリーフ尺度」²⁾を作成した。教師特有のビリーフとは、「生徒は、

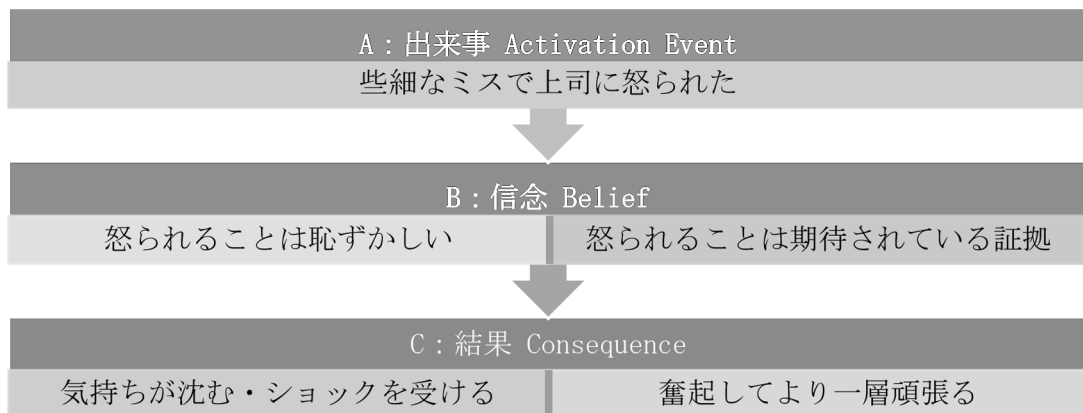


図1 論理療法のABC理論の図式化（筆者作成）

担任の教師の指導を素直に聞く態度が必要である」や「教師は生徒のあやまちには、一貫した毅然たる指導をする必要がある」などの指導行動や、生徒の態度に対する教師が持つ信念や心情、言い換えれば、そうあるべきであるという価値観や思い込みである。彼らの研究では、教師特有のビリーフが、教師自身の自然な感情や行動を阻害し、子どもたちの学校生活における振る舞いにもネガティブな影響を及ぼすことを明らかにした。この河村・國分(1996a・1996b)の質問紙をベースとして、教育心理学を中心に研究成果が蓄積されている。例えば、教員のイラショナル・ビリーフとバーン・アウト(燃え尽き症候群)との関連性を明らかにした研究(森田, 2008)や、中学校教師のイラショナル・ビリーフと精神的健康の関係について調査した(土井一博・橋口英俊, 2000)など、教員のメンタルヘルスに関連する研究が散見される。他には、鈴木郁子(2008)は小学校・中学校・高等学校の教師のビリーフに関する比較研究を行い、「毅然とした集団指導」は、どの発達段階でも顕著に現れる共通して教師が持つイラショナル・ビリーフであることを明らかにした。また本田真・河村茂雄(2019)では、学力低位校に勤務する教師のイラショナル・ビリーフが、特別支援教育に関する「特別視への抵抗」に対して得点が有意に高いことが示され、学校タイプによって差異が検出されると報告されている。道徳教育と関連して述べると、どの学年や教育機関においても、個々の生徒の特性や多様性を考慮した指導への専門性への理解が必要であるし、イラショナル・ビリーフ自体が阻害要因になることについても留意すべきである、ということになる。

3. リサーチ・クエスチョン

イラショナル・ビリーフを取り扱った先行研究では、主に教員や教育実習の前後での教職に

対す心理の変化を検証する研究が散見された。しかしながら、イラショナル・ビリーフが教員という職業を経験することによって獲得されたものであるのか、あるいは、それとも教員を目指す学生が、当初から教職にという職業に対して抱くビリーフであるのかを検証した研究や、規律や礼節を重んずる道徳心との関連を扱った研究も数が少ない。したがって、本研究では作業仮説を、「教師特有のビリーフは、教員という職業を通じて形成される」とし、教員志望の大学生と教員を志望しない大学生にアンケート調査を行い、その差異を明らかにした。アンケートは、教員を志望する大学生と教員を志望しない大学生それぞれ30名(男女15名ずつ)の合計60名に依頼し、授業の前後10分程度で回答を求め、インタビューに応じることが可能な学生には追跡調査を依頼した。被験者は近畿圏内の大学生に通う大学生であり、教員免許取得に必要な科目を受講する学生(教員になる意志は確認済み)と、専門科目(救急救命士や作業療法士の資格を取得する学部)を学ぶ学生である。

アンケート調査で用いる質問紙では、河村・國分(1996a・1996b)の教師特有のビリーフ尺度から道徳教育と親和性がある主に生徒指導や生活指導の質問項目を抜粋し、谷山(2019)³⁾を参考に筆者が独自に作成した。(表3参照)

4. 結果

表4・表5に示されるように、質問Iの「あなたは道徳の授業が好きでしたか?」に対して、両群ともに、「嫌い・非常に嫌い」という意見は示されなかった。教員を志望する大学生は平均値4.07を示し、一方で教員を志望しない大学生は平均値3.59を示した。表5におけるクロス集計表を用いてカイ二乗検定を行ったところ、($\chi^2(3, N=60) = 9.01, p = .028$)と、統計的に有

表3 今回の調査で使用した質問紙

質問Ⅰ あなたは道徳の授業が好きでしたか？	
1・非常に嫌い 2・嫌い 3・どちらでもない 4・好き 5・非常に好き	
質問Ⅱ 次の質問に対して、あなたの意見に近い数字を選んでください。	
1・全く思わない 2・そうは思わない 3・どちらとも言えない 4・そう思う 5非常にそう思う	
1) 生徒は、担任の教師の指導を素直に聞く態度が必要である。	
2) 生徒の生活指導は、学校教育全体の場で適宜、継続的に行う必要がある。	
3) 教師は生徒のあやまちには、一貫した毅然たる指導をする必要がある。	
4) 生徒は、どの教師の言うことにも、素直に聞くべきである。	
5) 教師はその指示によって、学校の生徒に規律ある行動をさせる必要がある。	
6) 生徒の教育・生活指導には、ある程度の厳しさが必要である。	
7) 生活指導などでは、学校の教師全体が、同じ方針で取り組むことが大事である。	
8) 生徒は学校生活を通じ、集団のきまり・社会の決まりを、身に付けなければならない。	
9) 教師と生徒は、親しい中にも、毅然たる一線を保つべきである。	
10) 学級の決まりが緩むと学級全体の規律がなくなるので、教師は毅然とした指導が必要である。	
質問Ⅲ これからの社会を生きる子どもが最も身につけるべき力と思うものを3つ選んでください。	
自主性・自立・自由と責任	向上心や個性の伸長
思いやり・感謝・礼儀	友情・信頼
法律を守る精神・公正・公平・社会正義	社会参画・公共の精神・勤労
国際理解・国際貢献	自分や他人の命を大事にする心
自然を愛する心	家族愛・より良い学校生活・国を愛する心
希望と勇気・強い意志	感動すること・よりよく生きる喜びの重要さ
相互理解・寛容	その他：具体的に
選択していただいた回答に対してインタビューは（可能・不可能）	
可能な方は、連絡先をお願いします。ご協力ありがとうございます。ありがとうございました。	

筆者作成

意な差が検出された。つまり、教員を志望する大学生の方が道徳教育に対し、教員を志望しない大学生と比べて好意的な感情を持っていることが示されたわけである。

質問Ⅱの結果を表6に示す。数値は平均値であり、どの質問においても教員を志望する大学生の方が、教員を志望しない大学生に対して、教員特有のピリーフが強く検出され、質問1, 5, 8においては、教員を志望する大学生の平均

値が4以上を示していることも確認された。これらの質問Ⅰおよび質問Ⅱの結果より、「教師特有のピリーフは、教員という職業を通じて形成される」は棄却され、教員を志望する大学生の時代より、教員特有のピリーフはある程度形成されていることが示された。

質問Ⅲの結果を表7に示す。表7に示されるように、両群の間で顕著に差が示されているのは、教員を志望する大学生が主として「自分自

表4 質問Ⅰに対する回答

	教員を志望する大学生	教員を志望しない大学生
非常に好き	8	2
好き	16	14
どちらでもない	6	14
嫌い	0	0
非常に嫌い	0	0
合計	30	30
平均値 (標準偏差)	4.07 (0.704)	3.59 (0.682)

筆者作成

表5 質問Ⅰの実測値

	とても好き・好き	どちらでもない	合計
教員を志望する大学生	24	6	30
教員を志望しない大学生	16	14	30
	40	20	60

筆者作成

表6 質問Ⅱの結果

	教員志望	教員非志望
1. 生徒は、担任の教師の指導を素直に聞く態度が必要である。	4.07	3.60
2. 生徒の生活指導は、学校教育全体の場で適宜、継続的に行う必要がある。	3.77	3.60
3. 教師は生徒のあやまちには、一貫した毅然たる指導をする必要がある。	3.60	3.33
4. 生徒は、どの教師の言うことにも、素直に聞くべきである。	3.67	3.53
5. 教師はその指示によって、学校の生徒に規律ある行動をさせる必要がある。	4.03	3.77
6. 生徒の教育・生活指導には、ある程度の厳しさが必要である。	3.67	3.23
7. 生活指導などでは、学校の教師全体が、同じ方針で取り組むことが大事である。	3.73	3.40
8. 生徒は学校生活を通じ、集団のきまり・社会の決まりを、身に付けなければならない。	4.40	3.30
9. 教師と生徒は、親しい中にも、毅然たる一線を保つべきである。	3.97	3.40
10. 学級の決まりが緩むと、学級全体の規律がなくなるので、教師は毅然とした指導が必要である。	3.67	3.63

筆者作成

身に関すること」のカテゴリーの「自主性・自立・自由と責任」を重視する一方で、教員を志望しない大学生が主として「他者との関わりに関すること」のカテゴリーの「思いやり・感

謝・礼儀」を身に付けるべき素養として重視している点である。求めた回答に対してのインタビューの可否は、60名中28名が可能と答えた(教員志望の大学生21名・教員を志望しない大

表7 質問Ⅲの結果

		教員を志望する大学生	教員を志望しない大学生
自分自身に 関すること	自主性, 自律, 自由と責任	18	12
	向上心や個性の伸長	8	7
	希望と勇気, 強い意志	4	2
		<u>30</u>	21
他者との関わり にすること	思いやり, 感謝, 礼儀	12	16
	友情, 信頼	9	8
	相互理解, 寛容	6	7
		27	<u>31</u>
集団や社会との関わり にすること	法律を守る精神, 公平, 公正, 社会正義	5	5
	社会参画, 公共の精神, 勤労	8	8
	家族愛, より良い学校生活, 集団生活の充実	4	7
	郷土の伝統, 文化の尊重, 国を愛する心	4	4
	国際理解, 国際貢献	2	1
		23	25
自然や崇高なことに 関すること	自分や他人の命を大事にする心	5	5
	感動すること, よりよく生きる喜びの重要さ	3	5
	自然を愛する心	2	3
		10	13

筆者作成

学生7名であった) 28名に対して, 選んだ回答に対しての理由をメールで求めた。(表8参照)

5. 考察・教育的示唆

今回の調査で明らかになったことは, 以下の2点である。1) 質問Ⅰより, 教員を目指す大学生は, 教員を目指さない大学生よりも道徳教育に対して好意的であり, 2) 教員特有のピリーフに対しても, 教員を志望する大学生の方が強いピリーフを持っていることが示された。この2点より, 作業仮説である「教師特有のピリーフは, 教員という職業を通じて形成される」は棄却され, 教員を目指している大学生の時点でも, ある程度イラショナル・ピリーフは形成さ

れていることが明らかになった。特に, 質問1), 5), 8) の項目では, 教員を志望する大学生が, 教員を志望しない大学生と比べて非常に数値が高く, 平均値で4.0以上の点数をつけていた。質問5) が「教師はその指示によって, 学校の生徒に規律ある行動をさせる必要がある。」や, 質問8) が「生徒は学校生活を通じ, 集団のきまり・社会の決まりを, 身に付けなければならない。」と, 規律や集団・社会の決まりに対して重きを置く項目であり, 道徳教育との関連性も非常に高い。加えて, 教員を志望する大学生が, 将来身に付けるべき能力として, 「自身の決まりに関すること」を必要とされる素養としていた事実もあわせて, 自己規律を重

表8 質問Ⅲの選んだ選択肢に対する回答

		教員を志望する大学生	教員を志望しない大学生
自分自身に関すること	自主性・自律 自由と責任	当然だから (12件) 当たり前 (6件)	当然だから (2件) 当たり前 (3件)
	向上心や個性の伸長	これからの社会で、個性は大切 (2件)	個性は大切 (2件) 向上心を持って何事も行うことが大切 (1件)
	希望と勇気・強い意志	強い意志がこれからの社会で必要 (2件)	未来を生きるには必要 (1件)
		22件	9件
に他者との関わり	思いやり・感謝・礼儀	自分が教わった (4件) 人として当然 (11件)	自分が教わってきた (3件)
	友情・信頼	信頼関係は大事 (2件)	信頼関係は大事 (2件)
	相互理解・寛容	人に優しくすることは大切 (1件)	今の社会が優しくないから (1件)
		18件	6件
集団や社会との関わりに関すること	法律を守る精神・公平 公正・社会正義	社会に出るためには必要だから (8件)	社会に出るためには必要 (1件)
	社会参画・公共の 精神・勤労	働くことの意義を知っておいた方がいい (3件)	働くことは大事 (1件)
	家族愛・より良い学校 生活・集団生活の充実	学校や集団を楽しめる方がいい (1件)	
	郷土の伝統・文化の 尊重・国を愛する心	これからの時代に必要だから (2件) 日本を知らなければ世界を知らない (1件) 自分の地元を大切にしたい方がいい (1件)	
	国際理解・国際貢献	戦争が起こる状況を知るべき (1件)	これからのグローバルな時代に必要 (1件)
		17件	3件
自然や崇高なもののこと	自分や他人の命を 大事にする心	いじめによる自殺が増えているから (4件)	いじめによる自殺が増えている (2件)
	感動すること・よりよく 生きる喜びの重要性	いろんな物事に感動した方が人生が楽しい (1件)	
	自然を愛する心	環境破壊などが進んでいるから (1件)	海洋のマイクロプラスチックの問題 (1件)
		6件	3件

筆者作成

要視していることも伺えた。特に、追跡調査のメールでのインタビューにおいても、「人として当然」や「当たり前なこと・常識」と言う表記も複数見受けられた。この事実を道徳教育及

び、教育学的な視点から考察すれば、教員という職業を目指す大学生の時点で、自身や自己の規律に関して「～でなければならない」というイラショナル・ビリーフが強く、児童・生徒が

人としてこうあるべきという理想像が非常に高い。言い換えれば、彼らが教員になり、自身のあるべき像から外れた児童・生徒と対峙した時の寛容性や受容に対しての懸念が示される。本田（同）の言葉で示すと、「特定のふるまい方や考え方を全体に要請する圧力である水平的画一化」を示していることになる。

最後に教育的示唆として、多様な生徒との教育実践こそが教師としての成長につながるものであり、一様に決めつけられるものではないものの、様々な価値観を持つ多様な他者を理解し、共に生きる社会を目指す心を育む道德教育において、教師自身の価値観やビリーフによって指導行動や教育が示されないことが望ましいと言える。教師こそが「異質であること」の価値観を容認すべきであるし、受容し難い価値観や振る舞いへの排除を可能な限り少なくすることが望まれる。加えて、教職を目指す大学生の時点で、教師の特有のイラショナル・ビリーフが高く検出された事実から、実際に教壇に立った時の理想と現実に対して心理的ショックが、若い世代の教員の離職率の高さを説明できるであろう。教科化された道德教育に対しても、教師自身が学校教育におけるイラショナル・ビリーフに囚われないことが、多様な価値観を受け入れる教育実践に繋がると言えるのではないだろうか。その方向性として、教員免許制度に必要な科目や道德教育に特化した科目の見直しも必要になるであろう。様々な議論が起こった中で教科化であり、道德教育における実践研究の研鑽が今後より重要になる。

最後に今回の調査では踏襲できなかったことは、心理学理論を援用しながらも、心理学的な統計手法にて精査な結果を示せなかったことである。この点を次回の研究に繋げることを直近の課題とする。

より将来的には、冒頭に述べたように、この研究は、全体的な計画としては、学校文化と教

員文化、生徒の向学校文化と反学校文化の形成と変容に道德教育がどのようにかかわっているのかを検証するプロジェクトの一環であり、第一歩である。教員のイラショナル・ビリーフと教員文化がどのように関係し、生徒文化（向学校文化、反学校文化の双方を含む）にどのような影響を及ぼすのか、を明らかにすることを課題としたい。

注

- 1) 学校教育における道德は、戦前における「修身」を前身とし、家族愛や勤労、最も重要視する項目として、愛国心が示されていた。終戦後、GHQの指令により修身は廃止されたものの、1958年に学校教育法施行規則が改正され、教育課程に「道德の時間」が復活し、愛国心も加えて明記された。
- 2) 「生徒管理・生活指導（14項目）」、「教師の熱意・使命感（8項目）」、「期待する生徒の行動及び態度（6項目）」、「生徒に期待する教師への信頼感（5項目）」、「権威・役割志向の教師の対応（6項目）」の5つの尺度から構成された質問紙であり、教育観、価値観、児童観をビリーフの観点から捉えることを目的としている。
- 3) 兵庫県のA市、B市の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校教員（20代から60代の男女）223名に次世代の子どもたちにつけたい力を道德教育と関連して考察した。6割近くの教員が、命を大事にすることを示し、次いで、キャリア教育や情報化社会に対応する能力であることが示された。

参考文献

- Ellis, A (1975). *How to live with a Neurotic at Home and at Work*. New York; Crown Publishers, Inc. (國分康孝監訳 (1984). 『神

経症とつきあうには』川島書店).

Ellis, A., & Harper, R. A.(1975). *A new guide to rational living*. New Jersey; Prentice-hall. (北見芳雄監修, 國分康孝・伊藤順康訳 (1997) 『論理療法—自己説得のサイコセラピー—』川島書店).

大和久勝・今関和子・笠原昭男 (2019). 『いじめ・ジェンダーと道徳教科書—どう読む, どう使う—』株式会社クリエイツかもがわ.

河村茂雄・國分康孝 (1996a). 「小学校における教師特有のビリーフについての調査研究」『カウンセリング研究』第29巻, pp.44-54.

河村茂雄・國分康孝 (1996b). 「教師にみられる管理意識と児童の学校適応感との関係についての調査研究」『カウンセリング研究』第29巻, pp.55-59.

鈴木郁子 (2008). 「学校教師のビリーフに関する研究—小学校・中学校・高等学校教師の比較—」『人文学研究論集 (中部大学人文学部編)』第19号, pp.41-51.

谷山優子 (2019). 「次世代の子供につけるべき力と道徳教育との関連についての考察—教員アンケート調査の分析を通して—」『神戸女子大学文学部紀要』第52巻, pp.59-70.

土井一博・橋口英俊 (2000). 「中学校教師におけるイラショナル・ビリーフと精神的健康との関係」『健康心理学研究』第13巻, pp.23-30.

本田由紀 (2020). 『教育は何を評価してきたのか』岩波新書.

本田真・河村茂雄 (2019). 「特別支援教育における『個に応じた指導』を妨げる高校教師のイラショナル・ビリーフの検討—学校タイプによる差異に焦点をあてて—」『学校経営心理学研究』第8巻, pp.29-35.

森田慎一 (2008). 「教師のイラショナル・ビリーフとバーンアウトに関する研究」『北星学園大学大学院社会福祉学研究所北星学園大

学大学院論集』第11号, pp.93-105

参考URL

中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別の教科道徳編

https://doutoku.mext.go.jp/pdf/junior_high_school_02.pdf, 2022年5月26日閲覧

いじめに正面から向き合う「考え, 議論する道徳」への転換に向けて

https://www.mext.go.jp/content/20200305-mxt_kyoiku02-100002180_1.pdf, 2022年5月26日閲覧

(すえざわ なつこ 京都橘大学非常勤講師)

(やまのうち けんし 教育学科)